

美に魅せられて

# 水野義之さん（古布コレクター）

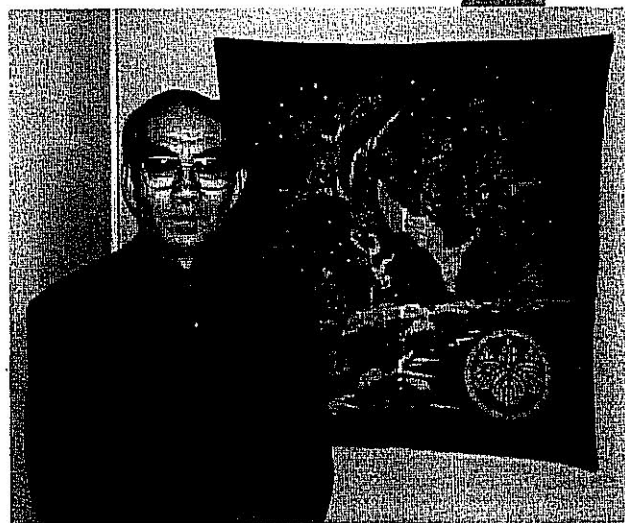


嫁入り布団

## 大胆な伸び布

「一代限りでしたが、ひいお祖父さんが紺屋を営んでいて、幼い頃はいつも藍の香りで暮らしていました。それがこれらを集めるようになった原点在るんでしょ」

広島市中区に住む水野義之さんが筒描き藍染めの古布を収集するようになったのは約三〇年前。もともと古い物を観て回るのが好きで、民具や民芸品の収集をする一環で古布も



水野義之さん

集めるようになったという。現在、その点数は三〇〇点を越える。華麗な模様が配された嫁入り布団や祝い風呂敷、筆筒長持などに掛ける油單、産湯に入れた赤ちゃんの身体拭き用の湯上げや足拭き、おしめ、古裂を継ぎ重ねて当てる庶民の寝具である襦袢の布団など、昭和初期までのものが中心。

筒描きは、渋紙の筒に入れた防染糊を絞りだしながら自由に糊を置いて模様を描き染めたもので、大胆で個性豊かな構図が多く、型紙では表現できない伸びやかな線が魅力だ。

水野さんのコレクションの中には、京都の東寺や北野天満宮、大宰府の骨董市へも足を延ばし、直接購入したものもある。市には僅か一〇〇〇円の布から三〇〜四〇万円もの布まで様々な品が並んでいるそうだ。また、何軒かの古物商に出物があれば知らせてもらえらるるように声を掛けておいて求めたりもする。しかし最近はいい物になかなか出逢えなくな

つてきているという。

三〇年の長きに亘り、ゆつくりと吟味を重ねて精選された布だけあって最高ランクのものも揃い、水野さんの目の確かさが窺える。

いい古布の見分け方のコツはと聞くと、やはり沢山の数を見て目を養うことに尽きるといふ。「高い値段がついているからといって必ずしもいいものとは限らないんです。初めて買うのであれば使い古されたもの、それも洗い晒されて、藍の色が冴えて美しくなったものを選ぶとまあ間違いないと思います。手織と機械織、手紡ぎ糸と紡績糸を見分けることも大切」

## 一枚一枚の模様が大切にされた数々の布

明治から昭和にかけて、庶民にとって藍の色は生活の色であり、衣服も普段着にしるよそ行きにしる藍で染めたものが基本で、布団などにも藍のものが使われていた。

また、藍染めに筒描きで模様を入れたものは、嫁入り支度や孫持えに重宝された。「嫁いでいく娘に持たせてやった吉祥文や家紋入りの掛布団なんかは、そりゃあ見事なもんですよ。これらは保存状態が極めて良く、綺麗



嫁入り布団